
理由がない悪意のクエスト。

オシノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理由がない悪意のクエスト。

【Nコード】

N2565Z

【作者名】

オシノ

【あらすじ】

生活に困った冒険者。つまり僕のことなんだがお金欲しさについて、身の丈に合わない仕事を請け負ってしまった。スライムにトロール。マッドサイエンティストが造った【キラーマシン】、拳句の果てにはベテランの冒険者、あまつさえ王家に選ばれた勇者でさえも手を出さない魔女とまでやりあうことになってしまう。一緒に戦ってくれる仲間もいなければ、友達もない。孤立無援の貧乏人が、レベル不相応のクエストに挑む冒険ファンタジー。

+++冒険のはじまり+++

お金がない。

安定した収入もない。

人望もない。

恋人もいない。

このままでは、魔王を倒す戦士としてやっていけるかの自信もない。

いや、自信が無いのなら取り戻せばいいのだが、問題はそんな簡単なモノではなかった。

この先冒険者としてやっていく展望がなかなか見えないからだ。要するに、今現在のこの職業に一抹の不安を持っている。

考えてみれば三年前。

「僕は、世界一の冒険者になる」と言って実家を飛び出さしたは良いが、現実はそのなりに甘くなかった。

勇者一族の血統を引く人間なら、王家から経済的な支援を受けられるし、なにか他の冒険者が持つてないような特技（例えば魔法）を持つていればギルドからスカウトがきて仕事に困ることもない。のだが、僕はサラブレッドでもなければ他人より秀でた特技もない。

国からの支援も無ければ、ギルドに頼ることもできない。

冒険者という人生に僕は完全に行き詰っていた。

しかし、食べていくためにはモンスターや賞金首を倒してお金を稼がなければならぬ。

今住んでいる部屋代は二カ月滞納しているし、水も止められた。

僕は情報を集めるために酒場に来た。酒場のいつかには情報幹旋所がある。

そこには、この地域一帯の情報が集まってくる。

賞金首や、倒すとお金がもらえるモンスター。新しいダンジョンが近場で発見されればそれを教えてもらうこともある。

酒場の端っこにあるカウンター。そこはお酒を飲む場所とは別の場所にある。

カウンターは、一人がけの椅子に狭いテーブルがあるだけ。

そこには、何年もこの仕事を続けているのであろう、手と顔に長い時間を物語るシワが深く刻まれたバアさんが座っている。

「仕事の情報を貰いにきたよ。バアさん」

「おお、また来たのかい。ご苦労さんなことだね」

お互い名前を知らない。それくらいの薄っぺらな関係なのだ。仕事の情報を聞ければ僕はそれでかまわないと思っている。

「それでどうだい、なにか良い仕事はあったかな？」

「良い仕事はみんなギルドに持ってかれちまってるよ。場末のこんな所に回ってくる依頼はどうしようもない下らないものか、ギルドや勇者でも手に負えないようなドギツイ仕事だけさ」

そんな仕事はやりたくない。

けど、食べていくためにはやるしかない。お金がないのだ、仕事を選べる立場ではない。

「死なない程度に、レベル3の冒険者でもこなせるような簡単なクエストをお願いします」

「うーん、レベル3ねえ。今は初心者にちょっときびしいような

仕事しかないねえ。アンタ特技はなんだい？」

「……特にありません」

自分に自信が無かったので小声でささやくように言うと、

「なんだって？聞こえないよ！」年寄りの耳には聞こえなかつたらしく聞き返された。

「うーん、特にないんだけど、しいて言えば孤独に耐える能力が高いですかね」

聞こえるように少し大きめなけで言いなおした。

「……使えないねえ。今の時代は人より秀でたものが一つ二つ、いや三つ程ないとやっていけないよ。だいたい孤独に耐えるって仲間がいなくてもいいだけだ。それじゃあウイークポイントだよ」

「……」

言われてみればバアさんの言うとおりだ。

・酒場から自警団までの道のり

「今はアンタみたいな低レベルの戦士が単独でこなせるようなクエストはないね」

「そこを何とかお願いします」

手を合わせ、まるで神様を拜むようにバアさんに手を合わせる。

「そんなコト言われたってないものはないよ。自殺志願者だったら別だけどね」

死にたくはない。だがこのまま仕事をしなかつたら餓死してしまう。

状況的には、引くに引けない。

まるで前門の虎、後門の狼。

「畜生……。僕はどうしたらいいんだ」

「そんなに困っているなら借金でもしたらどうだい？」

何を言っているんだこのバアさんは。ギルドにも属していないこんな低レベルのただの戦士に金を貸してくれる金融業者なんて、何処にあるだろうか。

あるわけがない。僕が金貸しだったら絶対に貸さない。

「借してくれる所なんてありませんよ。あー、僕にまだ目覚めぬ、眠れる力とかが宿っていればいいんだけどなあ。その力は強力な魔法で、ドラゴンでも一撃で倒せるみたいな」

「何言ってるんだい。人生はそんなに甘くないよ。そんなモノあるわけないだろ」

軽く怒られた。夢も希望もない人生だ。

「まあ、そんな話しはどうでもいいんですけど、ちょっと無理目の依頼でもいいんで、何かないですかね？」

「ないよ。また違う日に来な」

おそらくもう僕の相手をしたくないのだから、少し機嫌が悪くなってきた。

「そんなこと言って、良い依頼を隠してるんじゃないの？」
バアさんに食い下がる。

「しつこい！」

怒鳴らせた。怒らせてしまったようだ。

これ以上、機嫌を損ねたら依頼を斡旋してもらえなくなる。僕はこれからの付き合いを考えて酒場を出ることにした。

「町の近くにいるスライムや、吸血コウモリを倒しても金にならないしなあ」

町の自警団に属していれば、迷惑モンスターを倒した場合、討伐料が出るのだが僕が勝手にモンスターを退治しても何もでない。

骨折り損のくたびれもうけだ。

くたびれるどころか死ぬ危険性まである。

なんとか日銭を稼げる方法を考えるけど思いつかない。

人間、地道に働かなくてはいけない。

けれども今の状況の僕では、それをすることもできないのか

まあ、何でもいいからできる仕事を探すか。

この際、モンスター退治やダンジョン探索の仕事じゃなくても良いんだ。

道具屋や武器屋でも、この際ゴミ掃除やパン屋でもいい。生きるために働く。

僕は、町の入り口の近くにある自警団の建物へ歩いていく。

自警団は町をモンスターや盗賊から守るだけでなく、町の治安を守ったり、落とし物を探したりしてくれる。

道に迷った時なんかは場所を教えてくださいたりもするのだ。

僕はその建物の入り口に立っていた人物に声をかける。

「すみません。ちょっと職業安定所までの道を教えてもらいたいですけど」

職業安定所とは、仕事がない人に働く環境を提供してくれる場所のことであった。

・自警団にて

入り口に立っていた人が道案内担当の人を呼びに行く。
椅子があったので、座って待っていると目の前に賞金首の張り紙が
あった。

・狂った科学者の操る【キラーマシン】
研究所を自らが作ったマシンで全て破壊した科学者。犯人以外の
研究員は全員死亡。

賞金：15000ゴールド

・人喰いピーグル
狂犬。飼い主の命令を聞かない。捨てられた。

賞金：8000ゴールド

・堕ちた天使
人を食うことを覚えてしまった天使。一度人の肉を食べた天使は
その味を忘れない。
光術系の魔法を使う。

賞金：24000ゴールド

「何か情報あったら、すぐに教えてくれよ」

「いいですよ。解りました」

「ただし、見つけても絶対に手を出すなよ……特にキラーマシンと魔女はな。殺されるのがオチだぜ」

言われなくてもわかっていた、僕のレベルで勝てる相手じゃない。キラーマシンや魔女と言わず、どれと戦っても一瞬で負ける自信がある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2565z/>

理由がない悪意のクエスト。

2011年12月10日00時58分発行